

圖 縮

著 聲 秋 田 德



店 書 山 小

德田 秋聲 著
內田 巖 畫

縮圖



小山書店

印刷 昭和二十一年七月一日
發行 昭和二十一年七月十日

「縮圖」

㊦ 定價四拾圓

著者徳田秋聲^{とくだしうせい} 發行者小山久二郎
東京都澁谷區千駄谷四丁目八百拾六番地 印刷
者山田三郎
東京都板橋區志村町五番地

發行所 小山書店

東京都澁谷區千駄谷四丁目八百拾六番地
振替口座東京三九八七二
印刷製本 凸版印刷株式會社

縮 圖

日蔭に居りて

一

晩飯時間の銀座の資生堂は、いつに變らず上も下も一杯であつた。

銀子と均平とは、暫く二階の片隅の長椅子で席の空くのを待つた後、やがてずつと奥の方の右側の窓際のところへ座席を取ることが出来、銀子の好みで此の食堂での少し上等の方の定食を注文した。均平が大衆的な淺草あたりの食堂へ入ることを覺えたのは、銀子と附合ひたての、もう大分古いことであつたが、それ以前にも彼がぐれ出した時分の、舞踏仲間につれられて、下町の盛り場にある横丁のおでん屋やとんかつ屋、小料理屋へ入つて、夜更まで飲み食ひをした時代もあり、映畫の歸りに銀子に誘はれて入口に見本の出てゐるやうな食堂へ入るのを、さう不愉快に

も感じなくなつてゐた。反つて大衆の匂ひをかぐことに興味をすら覺えるのであつた。それは一つは養家へ對する反感から來てゐるのでもあり、自身の生活の破綻を諦め忘れようとする意氣地なさの意地とでも言ふべきものであつた。

しかし今は長いあひだ惠まれなかつた銀子の生活にも少しは餘裕が出來、いくらか吻とするやうな日々を送ることが出來るので、いつとはなし均平を誘つての映畫館の歸りにも、いくらかの贅澤が許されるやうになり、喰ひしん坊の彼の時々の食慾を充たすことくらゐは出來るのであつた。勿論食通といふ程料理の趣味に耽るやうな柄でもなかつたが、均平自身は經濟的にも成るべく合理的な選擇はする方であつた。戦争も足かけ五年つゞき物資も無くなつてゐるには違ひないが、生活の何の部面でも公定價格にまで總ての粗惡な品物が吊りあげられ、商品に信用のおけない時代であり、景氣のいゝに委せて、無責任をする店も少くないやうに思はれたが、一方購買力の旺盛なことは疑ふ餘地もなかつた。

パンやスープが運ばれたところで、今まで煙草をふかしながら、外ばかり見てゐた均平は、吸差を灰皿の縁におき、バタを取り分けた。五月の末だつたが、その日はひどく冷氣で、空氣がじ

とじとしてをり、鼻や氣管の悪い彼はいつもの癖でつい嚏くしゃみをしたり、ナプキンの紙で水漬をふいたりしながら、パンを捲むしつてゐた。

「ひよつとすると今年は凶作でなければいゝがね。」

素朴で單純な性格を、今以て失はない銀子は、取越苦勞などしたことは、曾てないやうに見えた。幼少の時分から、相當生活に虐げられて來た不幸な女性の一人でありながら、何うかするとお天氣が遽にはかにわなくなり氣分がひどく險しくなることはあつても、陰氣になつたり鬱ふさぎ込こんだりするやうなことは、絶對になかつた。苦勞性の均平は、どんな氣分のくさくさする時でも、そこに明るい氣持の持方を發見するのであつた。彼女にも暗い部面が全然ないとは言へなかつたが、過去を後悔したり現在を嘆いたりはしなかつた。毎日の新聞は能く讀むが、均平が事件の成行を案じ、一應現實を否定しないではゐられないのに反し、動うごもすると統制で蒙りがちな商賣の遣りにくさを、こぼすやうなこともなかつた。

「幕末には二年も續いてひどい飢饉があつたんだぜ。六月に拾を著るといふ冷氣でね。」

返辭へんじのしやうもないので、銀子は黙つてパンを食べてゐた。

次の皿の来る間、窓の下を眺めてゐた均平は、ふと三臺の人力車が、一臺の自動車と竝んで、今人足の目間苦しい銀座の大通りを突切らうとして、しばし此の通りの出端に立往生してゐるのが目についた。そしてそれが行きすぎる間もなく、又他の一臺が威勢よくやつて来て、大通りを突切つて行つた。

二

勿論車は二臺や三臺に止まらなかつた。レストウランの食事時間と同じに、ちやうど五時が商賣の許された時間なので、六時に近い今が恰も潮時でもあるらしく、ちよつと間においては三臺五臺と駈出して来る車は、看々何十臺とも知れぬ數に上り、動もすると先が闇へるほど後から押寄せて来るのであつた。それは殊に今日初めて見る風景でもなかつたが、食事前後にわたつて可なり長い時間のことなので、ナイフを使ひながら窓から見下してゐる均平の目に、時節柄異様の感じを與へたのも無理はなかつた。

こゝには恐らく明治時代における文明開化の發祥地で、又その中心地帯であつたらしく、均平の

少年期には、既に道路に煉瓦舗装が出来てをり、馬車がレールの上を走つてゐた。殆ど總ての新聞社はこの界限に陣取つて自由民權の論陣を張り、洋品店洋服屋洋食屋洋菓子屋といふやうなものも此處が先驅であつたらしく、この食堂も化粧品が本業で、わづかに店の餘地で縞の綿服に襷掛けのボオイが曹達水の給仕をしてをり、手狭な風月の二階では、同じ打份いでたちの男給仕が、フランス風の料理を食ひに來る會社員達にサアビスしてゐた。尾張町の角に、ライオンと云ふカフェが出来、七人組の美人を給仕女に備つて、慶應ボオイの金持の子息むすこや華族の若様などを相手にしてゐたのもさう遠いことではなかつた。その頃になると、電車も數けて各區からの距離も短縮され、草蓬ぼうそう々たる丸の内の原つばが、立ちたちどろに煉瓦造りのビル街と變り、日露戦争後の急速な資本主義の發展と共に、歐風文明も漸くやうやこの都會の面貌を一新しようとしてゐた。銀座には旨い珈琲や菓子を食べさす家が出来、勤工場の階上に尖端的なキャヴァレイが出現したりした。やがてデパートメントストアが各區域の商店街を寂れさせ、享樂機關が次第に膨脹するこの大都會の大衆を吸引することになるであらう。

この裏通りに巢喰つてゐる花柳界も、時に時代の波を被かぶつて、或る時は彼等の洗鍊された風俗

や日本髪が、世界戦以後のモダアニズムの横溢につれて壓倒的に流行しはじめた洋装やパーマネントに押されて、晝間の銀座では、時代錯誤アナクロニズムの可笑しさ身すばらしさをさへ感じさせたこともあったが、明治時代の政權と金權とに、樂々と育まれて來たさすが時代の寵兒であつただけに、その存在は根強いものであり、或る時は富士や櫻や歌舞伎などと共に日本の矜りとして、異國人にまで讚美されたほどなので、今日本趣味の勃興の蔭、時局的な統制の下に、軍需景氣の煽りを受けつゝ、上層階級の宴席に持囃され、たとひ一時的にもあれ、曾ての勢ひを盛返して來たのも、この國情と社會組織と何か抜き差しならぬ因縁關係があるからだとも思へるのであつた。

「今夜はとんぼあたりで、大宴會があるらしいね。」

均平は珈琲を掻きまはしながら私語いた。

生來ぶつ切ら棒の銀子は、別に返辭もしなかつたが、彼女は彼女でそんな事よりも、もつと細かいところへ目を注いでゐて、車のなかに反りかへつてゐる女達の服裝について、その地や色彩や柄のことばかり氣にしてゐた。それといふのも彼女も亦場末とはいひながら、一かどの藝者の抱へ主として、自身はお化粧嫌ひの、身装みなりなどに一向頓著しないながらに、抱への御座敷著には、

相當金をかける方だからであつた。それも安くて割のいいものを搜すとか、古いものを押くり返し染め返したり、仕立直したり、手数をかけるだけの細かい頭腦を働かすことはしないで、總て大雜把にてきぱき捌いて行く方で、大抵は呉服屋まかせであつたが、商賈人の服裝には注意を怠らなかつた。

「この花柳界は出先が遠くて、地理的に不利益だね。」

均平は呟きながら、いつか黄昏の色の迫つて来る街をぼんやり見てゐた。

三

均平は、こんな知名の華やかな食堂へなど入る度に、今ではちよつと照れ氣味であつた。今から十年餘も前の四十前後には、一時ぐれてゐた時代もあつて、ネオンの光を求めて、其頃全盛を極めてゐたカフェへ入り浸つたこともあり、本來さう好きでもない酒を呷つて、連中と一緒に京濱國道をドライブして本牧あたりまで踊りに行つたこともあつたが、その頃には船會社で資産を作つた養家から貰つた株券なども多少残つてゐて、可なり派手に札幌を切ることも出来たのだ

が、今は悉皆境遇がかはつてゐた。今から回想してみると其頃の世界はまるで夢のやうであつた。これといふ生産力もなくて、自暴氣味でぐれ出したのが段々嵩じて、本來の自己を見失つてしまひ、一度軌道をはづれると、抑制機も利かなくなつて、夢中で遊びに耽つてゐたので、酒の醒めざわなどには、何か冷たいものがひやりと背筋を走り、昔の同窓の噂などを耳にすると、體が疼くやうな感じで飲んだり遊んだりすることが眞實は別に面白い譯ではなかつた。殊に雨のふる夜更などに養家において來た二人の子供のことを憶ひ出すと、荊で鞭打たるゝやうに心が痛み、氣弱くも枕に涙することも屢々であつた。しかし殆ど酷薄ともいへる養家の仕打に對する激情が彼の溫和な性質を、そこへ驅り立てた。

今は既にその惡夢からもさめてゐたが、醒めた頃には金も餘すところ幾許もなかつた。それでも氣紛れな株さへやらなかつたら、新婚當時養家で建てゝくれた邸宅まで人手に渡るやうなことにもならなかつたかも知れなかつた。

その頃には世の中もかはつてゐた。放漫な財政の破綻もあつて、財界に恐慌が襲ひ來り、時の政治家によつて財政緊縮が叫ばれ、國防費がひどく切り詰められた。均平も學校を卒業すると直

ぐ、地方廳に官職をもつたこともあるので、政治には人並みに興味があり、議會や言論界の動靜に、それとなく注意を拂つたものだつたが、彼自身の生活がそれ處ではなかつた。それに官界への振出しに、地方廳で政黨色の濃厚な上官と、選舉取締りのことなどで衝突して、即日辭表を叩きつけてからは、官吏がふつふつ厭になり、一時新聞の政治部に入つて見たこともあつたが、それも客氣の多い彼には、人事の交渉が煩はしく、直きに罷めてしまひ、先輩の勧めと斡旋で、三村の妹の婿が取締をしてゐる紙の會社へ勤めた。そこがしつくり箝つてゐると思へないのであつたが、田舎に残つてゐる老母が、どこでも尻のおちつかない、物に飽き易い彼の性質を苦にして漢學者の父の詩文のお弟子であつた其の先輩に頼んで、それとなし彼を戒めたので、均平も少し恥かしくなり、意地にもそこで辛抱しようと決心したのであつた。そしてそれが三村家の三女と結婚する因縁ともなり、三村家の別家の養子となる機縁ともなつたのであつた。

しかし均平に取つて、三村家のさうした複雑な環境に身をおくことは、決して心から楽しいことでも、有りがたい事でもなかつた。祖父以來儒者の家であつた彼の家庭には、何か時代とそぐはぬ因習に囚はれがちな氣分もあると同時に、儒教が孤獨的な道德教の多いところから、保身的

な獨善主義に陥り易く、さういふ處から醸された雰圍氣は、均平には遣切れないものであつた。それが少年期から壯年期へかけての、明治中葉期の進歩的な時代の風潮に目ざめた均平に、何かしら叛逆的な傾向をその性格に植ゑつけ、育つた環境と運命から脱け出ようとする反撥心を唆らずにはおかなかつた。それゆゑ學窓を出て官界に入り、身邊の世のなかの現實に觸れた時、勝手がまるで違つたやうに、上官や同僚が總て虚偽と諂諛てんげんの便宜主義者のやうに見えて仕方がなかつた。しかしそつち此方轉々して見て、前後左右を見廻した果に、いくらか人生がわかつて來た。人間の社會的に生きて行くべき方法も領けるやうな氣がして、持前の圭角が除れ、遽に足元に氣を配るやうになり、養子といふ條件で三村の令嬢と結婚したのであつたが、内面的な悲劇もまた其處から發生しずにはゐなかつた。

四

こゝでは酒が飲めないので、均平は何か間のぬけた感じだつたが、近頃はさう物に拘泥こにだはらず、總てを貴方まかせといふ風にしてゐるればゐられないこともないので、酒の拂底ふっていな今の時代でも、

格別不自由も感じなかつた。勿論心臓も少し悪くしてゐた。かうした日蔭者の氣樂さに馴れてしまふと、今更何をしようといふ野心もなく、それかと言つて自分の愚かさを自嘲するほどの感情の熾烈さもなく、女子供を相手にして一日一日と生命を刻んでゐるのであつた。時にははつとするほど自分を腑^ふ効なく感じ、いつそ満洲へでも飛び出してみようかと考へることもあつたが、あの邊にも同窓の偉いのが重要ポストに納まつてゐたりして、何をするにも方嚮が解らず、自信を持たず、卒^いとなると才能の乏しさに怯^{おそ}けるのであつた。四十過ぎでの蹉跌を挽回することは、事實さう容易いことでもなかつたし、雙髮に白いものがちか／＼する此の年になつては、何處へ行つても使つてくれ手はなかつた。

二人が席を立つと、後連がもう遣つて來て、傍^{そば}へ寄つて來たが、それは中産階級らしい一組の母と娘で、健康其物のやうな逞しい肉體をもつた十六七の娘は、無造作な洋装で、買物のボール箱をもつてゐた。均平は彈けるやうな若さに目を見張り、笑顔で椅子を譲^{ゆづ}つたが、今夜に限らず銀座邊を歩いてゐる若い娘を見ると、加世子のことが思ひ出されて、暗い氣持になるのだつたが同窓會の歸りらしい娘達が、嬉しさうに派手な著物を著て、横町のしる粉屋などへぞろ／＼入つ

て行くのを見たりすると、その中に加世子がゐるやうな氣がして、わざと顔を背向けたりするのだつた。加世子が純白な乙女心に父を憎んでゐるといふことも解つてゐた。そして其が又一方銀子に取つて、何となく好い氣持がしないので、彼女の前では加世子の話はしない事にしてゐた。その癖銀子は内心加世子を見たがつてはゐた。

「可いぢやないの。加世子さん何不足なく暮してゐるんだから。」

加世子の話をすると、均平はいつも問まされるのだつたが、それは均平の心を安める爲のやうでもあり、恵まれない娘時代を過した彼女の當然の僻みのやうであつた。

階段をおりると、明るい廣間の人達の楽しさうな顔が見え、均平は無意識にその中から知つた顔を物色するやうに、瞬間視線を配つたが、こゝも客種がかはつてゐて、何かしら屈托のなささうな時代の潑刺さがあつた。

「いかゞです、前線座見ませんか。」

映畫狂の銀子が追ひ縋るやうにして言つた。彼女は太抵朝の九時頃から、夜の十一時まで下の玄關わきの三疊に頑張つてゐて、時には「風と共に去りぬ」とか、「大地」、「キユーリー夫人」と